R. P. Warrenの*Meet Me in the Green Glen*について

On R. P. Warren's *Meet Me in the Green Glen*

横　田　忠　輔
Tadasuke　YOKOTA

岐阜大学教養部英語研究室
（1972年10月31日受理）

1971年発刊の，R.P. Warrenの小説*Meet Me in the Green Glen*（A 5判型376頁）について考察し，その主題（theme）を解明したい。

第一篇（第一章～第四章。女主人公Cassieが青年Angeloに出会う。彼女をめぐる諸人物が紹介され，現在までの過去のいきさつが述べられる。），第二篇（第五章～第九章。深まって行くCassieとAngeloとの仲をMurrayが割こうとする。Cassieの夫が殺害され，裁判となり，Angeloの死罪が決るが，Cassieが自分が殺したと絶叫して告白し，クライマックスに達する。），第三篇（第十章～第十一章。LeroyがAngeloを救おうと努力する。監禁中のCassieが脱出してAngeloの救出に奔走し，Cyに事件の真相を語る。Angelo死刑となる。），エピログ（第十二章。後日談でCassie，Murray，Cy，Leroyの，その後が語られる。）の四部から成っている。殺害事件は巧みに，綿密に構想されている。

舞台はTennessee州西部Cardwell郡の，やがてダムのため水中に沈んでゆく運命のSpottwood Valleyと，その附近。物語は1958年を現在時点として過去へ遡り，未来に及ぶ。

万能の作者（Omniscient Author）の視点から，三人称で語られ，一人の人物でなく，多くの人物に照明があてられている。Flashbacksが頻繁に用いられる。描出話法（Represented Speech）の活用が著しい。

各主要登場人物について観察する手をとるとして，先ずCassie Killigrew Spottwoodを取上げながら，彼女と関係する諸人物を眺めるようにしたい。農場主の娘に生れた彼女の初恋の相手は，昔の親しい学友で山男（hillbilly）のCy Grinderであった。彼は製材所に勤め，傍ら通信教育で技師になろうと勉強――技師になるまでは品位ある彼女の体に触れまいと思った。家柄を誇る彼女の母親の目を盗んでの逢引で，一日彼女を乗せてドライブに出た彼の車が事故を起し，負傷した彼女が入院したさきの病院で彼女の母に痛罵されると，それも尤もと考え，病床の彼女の方を振り向きもせずに病室を出，通信教育の教材を穴に埋めて西部へ向かう。1938年のことであった。（彼が色々重労働をやり，従軍までして郷里Spottwood Valleyに帰り，Gladys Peegrumと結婚するのは8年後の1946年である。）同じく1938年の春Cassieは農場主の息子Sunderland Spottwoodの後妻となった。（彼の先妻というのはCassieの叔母で，長く肺を煩い，その看護を，Cyが出奔するとすぐ，母が，父の反対を押し切って，Cassieに言いつけていた。先妻の葬式後早々の結婚で，既に巧みに言い寄っていた彼の甘言に誘われた形でもあった。）小柄な彼女と似つかぬ，力の強い，怒るとブンゼン灯のように眼が燃える，横柄な大男で，不身持から大学入学後程なく放校処分を食らった経歴もある彼との結婚生活は不幸であった。肉欲的な彼の子を妊まされた黒人女Arlita

のために善処方を夫に弁じる苦しみもなめねばならない。1941年日本軍 Pearl Harbor 攻撃の知らせを聞くと，夫の彼は従軍を志願したが，高血圧の理由で拒否され苛立った。病死した彼女の母の葬式に当たって涙が出ずに，笑いが不意に飛び出して，止らず，彼女は1942年の暮，Dr. Spurlin の精神病院に入院。経過は順調で，1946年春，夫が発作で倒れる——その頃帰郷していた Cy が発見——と，落ちぶれた家の経済は不如意で，夫の介抱のために退院し，彼の面倒を見つづけて１２年が過ぎ，1958年の現在43才，首から下が麻痺し，寝たきりの夫の一切の世話を一人で忠実に果している。苦労しながら，娘らしい無邪気さを失っていない。彼女は，今，自分の頭の内側にあるものと外側にあるものとの区別がつきかね，夢か現実か戸惑うこともある。主観と客観とのけじめを立てるのに骨が折れる。内なる自己と外なる現実との調和——それは，できないことであった。

雨にくすぶる或る日のこと，彼女は我が家の方へ歩いて来るイタリー人の，若い放浪者 Angelo Passetto を見付けた。彼の姿は，暗い，みじめな，絶望的生活を送る彼女にとって，白熱の炎に輝く矩火のようであった。[①] 彼を雇って家事を手伝わせることになり，二人の愛欲が縺れて悲劇を生んで行く。

Cassie の，かっての恋人 Cy が彼女の土地で雄鹿を射止めて持ち帰ろうとする時，それが彼女の土地の雄鹿であるという真実を彼女が Angelo に証言させ，Cy をして，その雄鹿を彼女に返させ，退散させる事件が，Angelo の登場と偶々同時に，起きているが，嘘ではなく真実を語ることは，やがて，Angelo に対して，彼女自身の問題となる。

Cy を退散させる前に彼女の射った銃の弾丸が彼の足許に破裂したが，後でも分るように，彼を狙ったものではない。彼女の性格描写として役立ち，その後の彼女の行動に説得力を与える。

Cy の帰郷と結婚に彼女は動揺しなかったし，あの頃の自分は今の自分とは別者で，愚か者だったと考えることもできるが，彼のことを忘れたわけでは決してない。彼と楽しく過した若き日の夢から醒めて，悲しみと怒りを感じることもあった。あの時病床の自分の方を一寸でも振り向いていてくれたらと，昔の彼の，すげない別れを恨みながら，今の不幸を彼のせいにするのでもなく，復讐の心からでもなく，彼女は彼の面影を折に触れ思い浮かべる。深く思いを寄せる Angelo は他の女に心引かれ，彼女を苦しめた。「何も彼も絶えず自分から逃げ去って行くのは恐ろしいが，すべてが逃れ去って行くのは自分自身からで，どんな事も，その起り方は自分次第なのだと思うと，自分の不幸な運命に堪えられ，平静な気持ちになれそうだった。出かけた Angelo が帰って来なければ，そうなれると思う。[②]」しかし彼は戻って来た。

24才の Angelo。11年前 Sicily の Savoca のあばら屋で父が死ぬと，そこからアメリカの Ohio 州にいる伯父の許へ送られ，彼の農場で働くうちに自分自身も含めて世の中の一切を憎悪し，Cleveland へ逃れ，そこで放蕩生活に身を持ち崩した。武装強盗に巻き込まれ，殺人従犯の廉で Fiddlersburg 刑務所に入ったが，警察に協力を決意し，事件の解決に手を貸して，仮出獄を許された。ここへ来る道すがら，彼は，堕落した昔と違って，妙に自由と力とを感じていた。ここにおれば身は安全だと思う。かっての仲間から裏切者視される恐怖も付き纏う彼にとって，ここは現実の追手が入り込むことのない夢の世界であった。丘の頂上の杉の木の陰は絶好の隠れ場所で，そこへ毎朝家から逃げ出すように飛び出して行った。それによって家にいると自分から失われてしまう何かが回復できる思いであった。しかと名指すことのできない何かが，彼自身の心の奥で，丁度深海で魚が身を返す時その白い腹がちらりと一瞬光るように，動めいているのを知ると家に居たたまれなかった。[③] 家の中の何から逃

げ出すとも分らず，逃げ出して行った。彼は又家の仕事に飛び込んで，それによって救われるように，一心に働いた——薪割りに，家の修繕に，町への買い物に。これまで三年間そうしてきたように，努めて何も考えないようにした。自分を空白にしておきたかった。過去の思い出は苦い。仲間に「裏切り者」と呼ばれた恐ろしい夢を見る。

十二月の或る日焦燥に駆られて，彼は納屋の彼方へ丘の頂を超えてぶらつき，もとは搾乳場であった廃屋を発見し，そこに住む黒人女 Arlita の娘 Charlene—— Cassie の夫の落しだね——と近づきになった。彼の，いつもの恋の手管(てくだ)には乗らぬと彼女が警戒すると，自分の過去のしぐさを見透かされた思いで，かって「裏切り者」と呼ばれた時にだけ抱いた，あの罪悪感が頭を抬げ，気が抜けてしまう彼であった。

Angelo と Charlene との動静を Cassie は探らねばならない。スパイする彼女の眼を背に感じながら，Angelo は一つの出来事が他の一つの出来事に連関し，結び付く不可避性を意識する。

Angelo のベッドに寝て，彼の枕をひしと自分の顔に当てる Cassie。それをカーテンの陰から隠れ見て，躍り出た彼。彼女に対する彼の愛欲の度は深まって行った。Charleneをも恋する若い彼と，夫を持つ身の中年の彼女と，彼女にとって，彼は名前を持たない，一つの形としての人間，*him* であり，[4] 彼もそれに甘んじている。それは現実を離れて夢幻的であった。

彼は，彼女から逃げ出そうと企てながら戻って来て，夕飯が準備してあるのを見ると，自分が逃げ出したことを知りながら警察に知らせもせず，自分が帰ると予期していたのだと，彼女の不安の心を誤解し，束縛された感じで不快に思うが，帰宅した上は彼女の愛情に一夜の情事を重ねてしまう。彼は町で買った着物でなく，彼女が自分のために作ってくれた着物を着るようになった。昼は盲目的に家の修理に励み，夜は彼女と夢の世界を楽しみ，過去の追憶の感情は意味なく遠のき消え，昔の恐ろしい事件も忘れられて夢に現われなかった。今自分がどんな感情をもっているのか知りさえしないことには気付いたが，感情をもたないように努めていることには気付かなかった。Charlene のイメッジが時に影をさす。弁護士 Murray の訪問に不安を感じていた。年あけて1959年，二人の甘い忍び会いは続いて行った。

毎月 Cassie の家を訪れる，彼女の夫の友人で，弁護士の Murray Guilfort は二人の仲を割こうと努めたが，効果がなかった。一月彼が訪れて，Angelo を追い出せと彼女に迫った日の夜，彼女は，告げねばならぬ気持ちに駆られて，Angelo の部屋へ行き，夢を現実に戻すように彼に自分の名を改まっても一度言わせた後，彼にその日の Murray の言葉を伝え，所詮は罪のない彼を追い出さずに護る——この言葉を彼は自分を裏切り者視する仲間に聞かせたかった——こと，自分の生活が牢獄に閉じこめられていた彼の生活と同じで，彼の気持ちが本当に解ること，自由な気持ちになって欲しいし，この家から出て行きたければ，そうして欲しいと思うことを告げた。彼女の態度には，いつもと違った，新しいものがあり，二人は手を取り合った。

彼の部屋で目醒めた彼女は，今はじめて生れたような気がし，全世界が生れ変ったように思えた。彼は彼女の髪を梳り，それを赤いリボンで結び，口紅もつけて，彼女に自分は若く，美しいと感じさせた。二人でダンスを楽しんだ。

彼女は初めて彼を夫に会わせ，彼の質問に，夫を憎んだと答え，彼を愛すると答える。

二月の誕生日に彼女は彼の贈り物の，赤い着物を着，黒いベルトを締め，黒い長靴下，黒い上靴を履き，彼の手料理と彼とのダンスに酔い，少女のように笑った。楽しい夜の夢の世界があった。彼を知って，初めて生きることの意味が分った。

彼女は彼から自分の知らない色々なことを素直に教わり，それによって彼は，また，己の

空しさを満たした。彼は農耕の他に，牛や鶏を飼う計画も立ててみる。指環や下着を町で買って彼女に贈り，彼女の手足の指を赤く染めさせた。

時間を超えた二人の秘かな情愛の世界は何時まで続くか。三月の或る夜ベッドの中で彼女の体から発散する，彼の贈り物の香水の匂いが彼に嫌悪の念を湧かせた。昔彼が Cleveland で熱を上げた女，彼に夢中になった後他の男に走った女，の香水の匂いと同じであったからだった。真夜中彼はそっと抜け出し，Charlene の家へ行った。翌朝帰っ来た彼を彼女は，すべてを承知しながら，咎めなかったが，彼が贈った着物を脱いで，自分の古い着物を着用し，髪も梳いていなかった。

4月6日彼は負傷して帰って来た。Charlene と一緒に Parkerton の劇場の黒人専用入口で黒人だと偽り主張して切符を買おうとし，殴られた傷であった。彼の部屋で帰りを待っていた彼女は傷の手当てに幸福を味わう。運んだ食事に彼が微笑むのは楽しかった。同じ日，「彼に夢中になっている娘の Charlene に彼を近づけさせないでくれ」と母親の Arlita に頼まれる。回復すると，彼は狩りに出，又 Charlene の家に出入りした。

彼が獲物の兎を調理して流す血を見て，彼女は，常と異なり，気絶しそうになったり，その血の夢を見たりするが，それは，その後彼女が起す血腥い殺人事件の予兆となっている。しかし，彼は，度々の描写から，血を流す獣の調理に巧みな男であり，かって流血の殺人事件にも連累していたので，犯人は彼ではないかと思うし，サスペンスが生じ，血のイメッジは有効に用いられている。

Angelo と Charlene と二人が遠くで一つになった姿が Cassie の眼に映るが，彼女はこれら二人に名前を与えなかった。二つの，形をしたもの（shapes）であった。[5] そして二人の，二つのものの，後を追いかけて苦悩した。（Angelo と彼女自身の場合も，彼は，彼女の心の中で，名前のない，一つの形をした存在であった。彼と彼女の愛が現実に実ることは不可能であったか。彼女は苦しみに喘ぐ。生きるための真理は何であるのか。）

4月11日真夜中，彼女は彼から貰った赤いリボンに髪を整え，彼の贈った赤いドレスを着け，盛装して，彼の部屋へ行き，彼の返事がないままに，彼の寝息を耳にしながら，「あなたを逮捕させはしません」，[6]「又，あなたが私に話しかけたいと思っていたことも分ります。でも，その必要はなかったのです。愛しい Angelo さん，事情は分っているんですから。あの晩あなたに告げたこと――二度と閉じ込められた気持ちになって欲しくないと，どんなに私が思っているか――を忘れないで下さい。自由な気持ちで家から出て行って欲しいと，どんなに思ったことか。今でもそう思っています――もしあなたがそうしなければならないのなら」，[7]「あなたが戻って来れば――家の中へ入ってくれれば――私がいます――あなたは私を少しは愛して下さっているんですから――ねえ，Angelo さん，あなたは本当に私を少しは愛して下さったのでしょう。」[8] と語った。音を聞いて夫の部屋へ行き，30分近く経って彼の部屋へ戻って来ると，彼の部屋のドアは鍵が掛って入れず，ドアに凭れて床（ゆか）の上に横たわった。閉じた眼に夫も，Arlita も，Murray も，Charlene も，Cy も，そして Angelo さえも自分を嘲笑うのが見えた。

夫 Sunderland がナイフで刺し殺されたことを4月11日午前9時25分 Cassie が知らせ，死亡時刻は同日午前7時30分と断定された。

（二人が夫々贈られた着物を着る場合は愛情の上昇を，それを脱いで自分のものを着る場合は愛情の下降を示している。）

Murray Guilfort は，Sunderland と子供の頃からの遊び仲間で，彼同様農場主の息子であり，彼が Cassie と再婚の際，附添人を勤めた。彼より二つ年下の56才。昔 Chicago で，

Alfred Milbank に紹介して貰った女との遊びに熱を上げ，妻を離婚したいと思いさえした。意気地がなく，Sunderland をはじめ仲間から軽蔑されていたが，人は，とにかく，何かを持たねばならないと奮発し，体の調子も心配で，Chicago 行きの女遊びを止め，現在検察官になっている。人に蔑まれないように，Tennessee 州大審院に出る最高の栄誉をにないたい。親友はなく，蔑まれた過去を想い出すのに堪えられず，今に真の自分を顕わし，勝利と復讐の喜びに満たされようと思うが，何のための復讐なのか分らなかった。事実，それが復讐であることを知りさえしなかった。妻 Bessie と結婚した時自分のものになった家があり，その家にあるコリント柱――Corinthian という言葉が好きだった――が自慢である。この古い家を直すのに随分金をかけたが，それは大審院の判事になるための代償の一部であると思えた。妻との結婚も，その代償の一部だったろうと，ぼんやり考える。その妻も近年病死して一人暮し。彼の時計には，何処で貰ったのか，Phi Beta Kappa key がぶら下っている。きちんとしたのが好きで，だらしのないのが大嫌いであった。忙しいところを，何のために態々 Sunderland に会いに来るのかと，毎月彼の家を訪れながら思う。この家の修理を引受けようと Cassie に約束していた彼は，最初の訪問で，家が改修されているのに驚き，Angelo のせいだと知ったが，彼をこの家におくことに反対であった。友人一家の名誉のために，その面倒を見なければならないという美しい理念の下に，その実，そう気付く由もなく自分の名誉のために，そうしなければならない彼であった。Sunderland の不品行には目をつぶり，彼女と Angelo との肉体関係を心配する。毎月彼女に自分の金を渡し，Sunderland の金を投資して上がる金だと嘘をついた。ついた嘘を信じ始めながら，嘘に絡まれながら，どんな種類の嘘か自分にも分らなかった。渡した金の受領証は，その都度取って，丹念に綴じ，事務所に保管している。しめて，かなりの額に上った。

Angelo の前歴を洗って，彼女に知らせ，彼を家から追い出すよう迫り，彼女の拒絶に会うと，遂に4月10日，彼の仮釈放を取消すと高圧的に出て彼女を苦しめる。Sunderland 殺害の犯人は彼の心の働きの必然として彼女でなく Angelo でなければならなかった。彼は Angelo を犯人に仕立て上げて行く。4月10日彼女と共に Angelo の部屋で発見し，Sunderland の部屋に置き忘れて帰った Angelo のナイフは，それに役立った。彼女が Dr. Spurlin の精神病院で療養していたという事実は彼の構想の促進に好都合で，麻酔薬を注射したり，鎮静剤を飲ませたりして彼女の精神を有利に操作することもできた。Dr. Spurlin は経済的に彼の恩顧を受けている。腹心と見た，妻の従姉妹の Miss Edwina Parker を抱き込んで，裁判の前後 Cassie の世話をさせた。誰が陪審員であるかを調べて，打つべき手は打った。自分は証人として法延に出，自分の下で働く，股肱の Jack Farhill が代って告発者になる手筈にも抜け目はなかった。Cassie と Angelo との深い仲がばれぬように，彼が彼女に贈った衣類の品々は4月11日検死の当日彼女の家の炉の中に半焼けになっているのを発見して，誰にも気付かれぬように引っ張り出し，自宅へ運び，書斎の金庫の中に隠しておいた。彼女は彼の説得に従って証言し，事は旨く運ぶだろう。Angelo――Kentucky 州で捕えられた――を罰し，友人 Sunderland の仇をとらねばならない。

裁判は6月，Angelo の依頼人として彼の弁護に立つ Leroy Lancaster に対抗して展開する。裁判上の論戦の次第はさておき，Leroy の善戦にも拘らず，情況証拠は一切 Angelo の不利に働き，彼に対する判決は第一級謀殺で，死刑と決った。それを聞いた Cassie は，飛び上って，「私が殺した」と絶叫し，物語りはクライマックスに達する。その絶叫は銀鈴の鳴るように朗々とした，断固たる叫び声[9]で，それを聞いた Angelo と Cassie との間に交された愛の情感の迸りは Leroy の忘れ得ぬものであった。

Cassie の証言は，初め，Murray の説得に同調した形であった。しかし，絶対安静を勧める医者の言葉をよそに，終始法廷に出た彼女は偽った，不純な自分を真実とすることはできなかった。この絶叫の告白は Murray が執拗に彼女に説いて納得させようとした興奮の迷妄（delusion）ではなく，彼女の曇らされた内奥の良心が，本来の美しい輝きを取り戻した証左であった。

彼女の告白で再審の可能性が生れ，Leroy は彼を救うため色々骨折るが，彼女を精神錯乱者と認めさせようとする Murray 一味の巧みな策動が効を奏して失敗した。彼女が真剣のあまり取り乱すと，精神異常のためと見做されてしまう。州の大審院に持ち込んだが，下った判決は前と同じで無駄骨となり，次いで人身保護令状を出して貰おうと，Cy の協力を得て，州知事宛の嘆願書を作成したが，取上げられなかった。こんな風になるのが世の中で，そのことを認識した上元気を出して義務を果さねばならないと思う。なお一縷の望みを失わず，*New Nation* 誌に訴えて知事を動かそうとする。

りっぱな法律教育を受けながら，Leroy は金の儲かる都会へ出ず，郷里 Parkerton で，この町の良心として，父のあとを継ぎ，開業した。遊学と従軍の期間を除けば，人生の全てを過した，この故郷は，亡き父母のそれを含めて過去の想い出に富み，人生の空しさを意識する時，彼の心を癒してくれる。他の人々を悪いと思ってはならない，自分も彼等と同じなのだと思う彼には人間の不完全さと，それが反映する不完全な人間世界とについての認識があり，そこから生れる社会への責任感がある。それが懐疑する彼の心を救い，自己を知って正義のために働かせるのであった。彼を愛して結婚した妻の Corinne は牧師の娘で不幸な人々の慈善救済に当っていた。50才に近づく彼に，まだ妻の切望する子供がない。裁判が済んだ日，彼は帰宅を延ばし，夜の迫る暗い事務所に独り坐って，Cassie の絶叫の告白に Angelo が示した，あの情熱に嫉妬と憎悪を感じたことを思い起して戦慄し，彼のため全力を尽したと信じた自分の不純さに身の内が出血する苦悩を味わう。[10] 更に，妻の肉体を自分は満足させ得たかと怪しみ，妻がいつも自分の不首尾を見抜いて，ベッドの中で，自分も慈善の対象であるように，やさしく慰めてくれるのがたまらなくなり，一人で勝利，成功の夢に縋り付きたいと思う。それが，この日帰宅を延ばした原因だった――今夜はどうかしていると思う。しかし，あらぬ思いを神に詫び，罪が浄まる思いで妻の許へ帰って行く彼であった。

Murray のため Edwina の邸宅に監禁されていた Cassie は，与えられた鎮静剤を飲むふりをして彼女を安心させると，部屋から脱け出て，こっそり新聞を探し，Angelo の処刑が3月21日午前12時5分であることを知り，秘かに Cy に電話して，今日が3月19日であると教えられ，又彼に車を廻してくれるよう頼んだ。

Cy の車に乗って，彼女は Nashville に向う。Angelo の釈放につき州知事に直訴するためであった。猛スピードで飛ばすその途次，彼女は事件の真相を告げ，Cy はそれを信じた――「4月11日朝 Angelo に金を与え，自分の車を使って Charlene と一緒に逃れるよう，そして彼女に親切にしてやるよう言いつけた。〝自分を美しくし，幸福にしてくれた彼を愛しており，幸福になって欲しい〟と言うと，彼は跪いて，私の両手に接吻した――彼に幸福になって欲しいと思ったから，私は死なんばかり幸福だった。そして彼は行ってしまった。それから夫の部屋へ戻って，4月10日 Murray が夫の部屋に置き忘れた Angelo のナイフで夫を殺した」[11] と。

官邸にも私宅にも知事は不在で，彼に会えず，涙に暮れる彼女を宥めて，止むなく引返す途中，彼に向って彼女は更に，「自分自身の一部が自分のやったことを信じないのは一番恐ろしいことです。鏡に自分自身の顔を映し，自分がやったんだと言い続けるうちに自分の顔

に何かが起り，血の気が失せ青白くなります。その時突然その顔が自分のやったことを信ずるのです。私はスマートで，彼が捕えられ，殺されるように何も彼も計画しました。彼の部屋に鍵が掛かっていて入れず，床(ゆか)の上に寝なければならなかったからです。電話線を切っておきさえしたのです。計画通りに運んで嘘が真実になり，取返す術(すべ)がないのです」[12]と語り，生きている限り真相を人々に信じさせたいと切望する。Angelo が電気死刑になる様子を，まざまざと心に描きながら一途に死にたいと願う彼女に Cy は「おだまり！何も考えないで，思い出さないで，何かを待つ気持ちなんか全くなしで，〝今〟だけを頭の中に置いておけば，何ということはないんだ」と諫めたが，それは苦しみの中で彼が自分自身に言い聞かせてきた言葉であった。彼は又「こんな自分を狂っていると思いますか」という彼女の問に「あなたは，しなければならないことをしなければならなかっただけのことだ」と答え，再び彼女に「昔，あなたが，あの病室のドアから，私の方を振り向きもせずに，出て行ったのも，そうしなければならなかったからですか」と訊かれると，「そんなこと分りっこない。やることをやり続けるだけのことさ」と答えた。

Parkerton の近くで入った食堂で，彼女が「昔あなたが，あんなにすげなく私と別れて行かなかったら，私たちは，今日のように，ここに坐っていることになったでしょう。多分 Parkerton に住んで。あなたは技師で，電力会社で働いて。Nashville の大学にいる子供に会いに行って，その帰り，お腹が空いて。多分――」と馳せる想像を，それ以上聞くに耐えられず，化粧室へ行った彼は「今」だけを考えることができずに，過去に伸し掛かられて苦しんだ。出て来ると彼女は見えず，食卓の上に置いた車の鍵がない。彼女は彼の車に乗って，獄中の Angelo に会おうと疾走していた。3月20日午後11時30分頃 Fiddlersburg の刑務所の門から入ろうとして追い返され，石壁のところで半ば意識を失っているのを巡回の警官が発見した。Angelo は21日午前12時17分死亡した。

Cassie の脱出を知った Murray は九仞の功を一簣に欠くにも似た思いで，一切の経費持ちで見張りと世話を委託しておいた Edwina と Dr. Spurlin を非難するが，逆に彼女から「人を利用し，人々から何かを吸い取って生きる男だ。誰でも一緒に居たいと思う程気立てがよく，夫に愛情深かった妻の Bessie もその例外ではなかった」と誹られる。Cassie と共謀して彼女の告白を，すべての人々に信じさせておけばよかったと彼女は言った。「Cassie を精神錯乱から救うために自分のしたことは正しく，それも充分合法的だった」と彼女に反駁したが，Angelo の死亡の知らせが入って，「目的を果して，嘸御満足でしょう」と彼女に言われた時，彼はそうではなかった――あの朝，背中にナイフを突き刺されてベッドに横たわっていた Sunderland の死体を見た時，輝かしい雪辱感を経験し，世界の正義が実現したように感じたことを，この時初めて，知った。彼の心の暗い内奥で，黒い，ひどくぬるぬるした，名状しがたい潮(うしお)が，ゆっくりと上の方へ溢れ出つつあった。[13]息遣いが荒かった。彼の正義は果して正義であったか。彼女の迷妄を突く前に彼自身が迷妄ではなかったか。

人を款待する骨(こつ)を心得，彼のもつ固さと軟らかさの対比が人生の皮肉を意識する人々の興をそそり，犠牲的に友情も発揮するし，うまい演説が誠実に見え，彼は勢力を張り，Sunderland 殺害の3年後に法務長官となり，その3年後には大審院の一員となって，年来の宿望を果した。10年若かったら上院議員になりたいと思う。売物に出た Edwina の邸宅を買って，自分の手がけた「西部テネッシー歴史協会」用の建物にした。今は麻薬中毒患者となった Charlene を抱えて苦労している Arlita のために土地のことで骨折ってやった。彼女は帰ろうとする彼に，Angelo の死刑は正しくなかったと嘲るようだった。

Cassie に会うことを思うと何も彼も味気なく，入院療養費は毎月支払って，会わずにい

たが，ずっと規則正しく彼女に会いに行っているCyに促されて，三年振りにMurrayは病院へ出掛け，彼女と対面した。Cyが言ったように，彼女は元気で，前と変って，全く新しい真理を体得していた。改った調子で彼に「人を愛したことがありますか」と尋ねた彼女は，今は何処か遠くへ行っているAngeloの幸福を信じ，自分も幸福であった。「みじめな自分を美しくし，輝かせてくれた，愛しい彼との別れは心臓を割かれる思いでしたが，彼は跪き，感謝して去って行きました。急に突然我身の老(おい)を感じて，愛する彼を去らせました」と彼女は語る。彼女の手は虚空ならぬ虚空に彼の顔を愛撫していた。利己的な名誉欲から，自分とAngeloとの仲を割くことに汲々とし，一切を捏造した彼を微笑して憐れむ彼女の明るい悦びから，Angeloの無罪を認めつつ，彼女を憎みつつ，彼は逃げ出したが，そこから逃げ出すものは何もなく，何かに向って逃げ出すだけで，それが恐ろしかった。[14] 我家へ着いて，Angeloが獄房から彼女に宛てた，そして彼女に見せなかった，手紙を取り出して読む。そこには，自分を救おうとする彼女の努力と数々の親切に深く感謝すること，何故か誰も彼女が真実を語っていると思わないこと，彼女を愛すること，彼女の手に接吻した時の彼女の微笑みが見えること，すぐ死刑になるが恐れていないことが，たどたどしく切々と綴られていた。「愛」とは何か。愛という言葉が彼の頭の中で，大きな洞窟の中でのように，空ろに鳴り響いた。[15] 寝室へ上ると，この家は牢獄のように思えた。周りの壁が彼に迫りつつあった。彼は自分自身の中に閉じ込められて，外へ出られなかった。[16] いつも自分自身の内側にいた。そして，いつも外に出ようと努めていた。力強いSunderlandのように，女遊びの巧いMilbankのように，尊敬される人のように，否獄中のAngeloのようにさえ，なろうと努めていた。しかし，自分自身が牢獄であれば，そこから外へ出ようとする何があり得よう。[17] 振り向いて姿見を見ることが怖くてできなかった——その奥を覗き込んでも何も見えまいと。[18]（鏡は自分を投影し，自己について省察する具として屢々用いられている。）「Cassie，あなたを愛していた」と叫んだが，それが嘘であることは知っていた。彼女を知ることさえなかったのだ。それは夢だった。その夢を彼は追わねばならなかったのだ。美人ではなかった妻の写真を見て，「他の男に持てなかった弱味から，又自分が，結局，彼女の家と金と友人と名声のために彼女と結婚するだろうという自分の弱点を知っていたから，自分を愛したのだ」と思う。彼女の愛は彼女の弱味のしるしであり，又自分の弱点のしるしでも———そう考えまいと彼は必死になり，自己（self）の利己的な汚れを知ろうとしないで，己を絶対完全化した。彼女を憎み，写真を落し毀して，誰をも愛し得ぬ彼は，すべての人間を憎んでベッドに入り，眠るための睡眠薬が一粒一粒増して一箱空になり，益々もうろうとする意識の中で悔悟に似たものが起らぬではないが，書斎の金庫の中に隠しておいた，AngeloからCassieへの贈り物の品々が見付けられはしないかと恐れていた。病院へ運ばれたが，生命を取り戻す見込みは殆どないというテレビ・ニューズを，深夜，Cyは聞いて，あたりまえだと思った。裁判の際，訊問に答えて，「毎月Cassieに与えていた金は自分の金でした」と，それまでと違って，真実を証言し，人生は美しいと感じたことのあったことを彼のために付け加えておこう。

ダムが建設され，大部分が水浸しになったSpottwood ValleyでCy一家は繁栄した。自分に愛情深く話しかけてくれるCassieの，過去に打勝っての，平静な，悦びの生活を見て，彼も秘かな満足の生活を送ることができた。昔のように酒をあおり，妻にあたることもない。公吏の仕事も引受けている。明日の仕事のことを考え，過去のことは考えずにすむようにし，過去は水中に没するよう願った。（水のイメッジもよく用いられている。）高校最上級生の娘があり，きれいで成績もよく，大学へやろうと考えている。悪い虫がついてわと心配で，娘の寝室を覗く習慣が

ついた。ある夜，眠られぬまま，家の外に出て，妻の顔が娘の顔に似ていることに，初めて気付き，どうして今まで分らなかったのだろうと思う。又，妻の顔を想い浮かべながら，妻がどんなことを考え，どんな風に感じてきたかしらと，初めて思う。それは不可思議な思いで，苦悶でもあったが，耐えて行かねばならないものだと考えられた。樫の木の陰から歩み出て，見上げると，全世界が月の光に包まれていた。彼は「今」だけを考えて生きて行けるものではないことを知り，過去を背負って未来を望むだろう。それは，また，彼が過去の罪を自覚し，連帯感と責任感をもって生きることに他ならない。彼は自律的に選択し責任をもって行動する主体性を確立するだろう。

自分の下で働いてはとの Murray の申し出を蹴り，自分を知って正義のために働いた Leroy は，かなり成功し，男の子が生れ，Farhill を抜いて検察官になった。思えば，この殺人事件は不愉快で，又悲しい，淋しい事件で，更に，どちらの側を支持する人も言っていることに確信が持てず，程なく人々は口に出さなくなった。しかし記憶し続けた。何か，わだかまる罪の意識と，それを贖って救われたい人々の気持ちが，Leroy が人気を得る原因となった。

以上主題を探ろうと主要人物を考察してきたが，これを総覧するに，Cassie が中心人物である。絶望と欲求不満の生活を送る彼女に Angelo がもたらした愛の夢は，彼が Charlene へ走ることによって破綻し，彼女の心は烈しく悶えたが，それを抑えて，老いる自分を捨て，愛する若い彼の幸福のために彼を，Charlene と共に，自分の憧れる自由の世界へ逃亡させ，彼女自身も幸福であった。彼は感謝して去って行った。彼女の，この崇高な愛は，彼女が再びもとの閉された世界の孤独と絶望の生活の中に残されて，夫を殺すと，煩悩のために彼への烈しい憎しみと変り，彼が犯人となるよう何も彼も巧みに計画し，その嘘構が Murray に煽られ真実となった。己の嘘を破って真相を伝え，彼を救おうと奔走する彼女の心には自己の汚れの認識があり，生きることは何であるかを教えてくれた彼への深い真実の愛情がある。彼は刑死したが，二人の愛は永遠となった。彼の幸福を信じ，自分も幸福である彼女の明るい，悦びの微笑——それから Murray は逃げ出した——は，彼女が過去において自分の，又他人の，犯した罪について深く考え，そこから新しく汲み取り，それによって自分を救い得た，人生の真理の賜物であり，自己を知り，自己を実現したこと（self-knowledge ; self-realization）のしるしである。[19] Angelo の死は Cassie の罪を贖った。

人は夢幻の迷妄を追って，その犠牲となり，悲劇を生む。自己を知る者のみが，その迷妄から醒める。Murray は醒め得なかった。利己的な己の利己欲から出た名誉の理想の利己的な濁りを知らず，それを絶対に清いと誤認し，この上なく大きな罪を犯し，人を苦しめ傷つけ，それが分らなかった。自己の濁り，罪を知らず，汚れた自分を真理とする彼には不安定な気持ちと空しさが付き纏い，人との本当の結び付きがなく，愛の理解がない。人生は，その道理が掴めず，模糊とし，真の責任感の生れる由もない。Cassie に憐れまれながら，すべての人間を憎みながら，睡眠薬をあおって己を殺すに至った。責任感からの自殺ではなかった。

なべて，自己を知らず，自分が無い者の言動は，理念が人間経験（human experience）を離れる。自己が善でもあり悪でもあり，黒白混交の灰色であることを知らないで善悪両極を分裂させ，あるいは自己を絶対白色であると見て灰色の人間社会を蔑り見捨て，あるいは自己を絶対黒色であると見て人間社会の黒色に甘んじ，かくて，人間の道を外れて疎外し，責任感は生れず，人間社会の，まっとうなあり方を阻まずにはいない。濁った，不完全な人間社会の灰色は己の灰色の反映であると知ることに，灰色であることを知って白色になるよう努めることに，この不条理な世界における，死を担う人間の結び合う，真の生き方が見出される。人間の灰色には罪，汚れがあり，それ故に人の世の出来事はすべて，この世の時間

の中で絡み合い，現在と過去と未来は相互に関連する。[21] これが，また，Cassie の体得した真理であり，それによって彼女は内なる自己と外なる現実とを調和させ，現実は自己の内にあると，それを正しく把握し，生命を保ち新しく生き得たが，この真理を Murray は，成功しながら，掴むことができなかった。高き理想——それは善悪混り合う人間性に即する具体性を欠いた抽象的理念に止まった——を掲げ，あるいは低い現実の安逸に得々と堕した彼は両極の調和を欠いで，真の人間経験を持ち得なかった。

この複雑な殺人事件の解決は Murray の「合法性」にではなく，自分が「ある」ことにあり，又そこにのみ，この物語の解決がある。

斯く考えて，本作の主題は，自己知識による永遠の愛の勝利である。夫を殺し，その罪を愛する男に着せた彼女は己の罪に徹し，人すべての自己が共有する罪を知ることによって，かっての，時間の無い迷妄の夢を彼方に，真に時間を超えて，刑死した彼と，この世で果し得なかった永久の愛に生きることができた。

題名は本作のエピグラフの一つである John Clare の愛の詩の最初の一行 〝Love, meet me in the green glen〟 から取られている。この Clare の詩と，も一つ，それと並べられたエピグラフの A. Marvell の愛の詩 ——風変りな愛を歌う——とに Angelo と Cassie との愛が偲ばれることを付記しておきたい。

Notes :

① R. P. Warren, *Meet Me in the Green Glen* (Random House, 1971), p. 358.
② cf. ibid., p. 94, p. 98. Cassie の我身に対する述懐である。
③ ibid., p. 49.
④ ibid., p. 109.
⑤ ibid., p. 218.
⑥ ibid., p. 223.
⑦, ⑧ ibid., p. 224.
⑨ ibid., p. 259. なお R. P. Warren の *All the King's Men* (Modern Library, 1953), p. 370 に 〝A bright, beautiful, silvery soprano scream〟 とあるを参考。これは母親が，かって情夫であった判事の死——息子が，父とは知らずに，はからずも責任自殺させた——を知って発する驚愕の叫びを述べたものである。
⑩ ibid., p. 278.
⑪ ibid., cf. p. 312.
⑫ ibid., cf. pp. 318－319.
⑬ ibid., p. 333.
⑭ ibid., p. 362.
⑮ ibid., p. 365.
⑯ ibid., p. 366.
⑰ ibid., p. 366. これは Murray についての評言。なお R. P. Warren の *Flood* (Random House, 1964), p. 396に Yasha が Cal のいる獄房を self と呼ぶくだりがある。
⑱ ibid., p. 366.
⑲ R. P. Warren の *World Enough and Time* (1950) は自己知識の欠如から生れる悲劇である。
⑳ cf. R. P. Warren, *All the King's Men* (Modern Library, 1953), p. 200.